

能登地域における11・12世紀代の口クロ土師器について(粗描)

柿田祐司

1. はじめに

11・12世紀という時代は土器研究の盛んな古代・中世にあって、その狭間であるためかそれほど研究が進んでいるとは言えない。それは中世の研究者にとっては、京都系土師器の受容以後についての関心が高く、古代の研究者にとっては須恵器の研究が主体であったからであろう。

加賀地域では田嶋明人・出越茂和や藤田邦雄らの研究、能登地域では小嶋芳孝や四柳嘉章など研究が知られる。ここでは、最近資料の充実してきた能登の11・12世紀代の資料を紹介し、口クロ土師器変遷を加賀地域の資料と対比しながら述べてみたい。

2. 資料

1) 寺家遺跡SK01(羽咋市)

内黒器種は、無台椀・有台椀ともに見られる。またミガキも行われている。柱状高台の皿も見られるが、後代のものに比べればまだ深みであり、椀形をしている。報告書では11世紀第3四半期頃に位置づけられている。ここでは後述の資料の内容から若干古く、11世紀第1四半期から第2四半期にかかる時期と推定しておきたい。

2) 貝田遺跡(羽咋郡富来町)

遺構一括出土のものはないが、出土地点毎にまとまった廃棄が見られる。特に古・新としたものは、ある特定の時期をあらわすものではないが、ある時間幅の中で土器の組成を良くあらわしている資料と考えている。3区資料は時期・組成を良くあらわす資料と考えている。

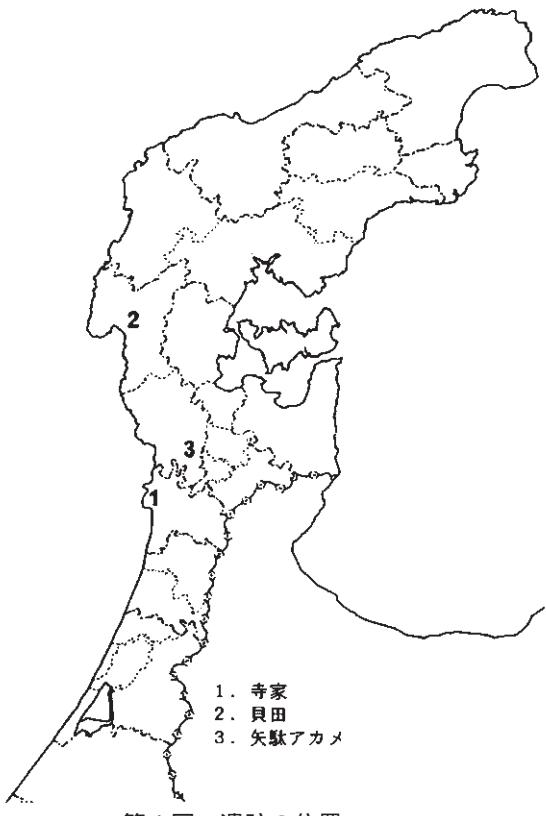
古 小型の無台椀が見られることを除けば、寺家遺跡SK01と組成は比較的似ている。個別に見れば無台椀は浅くなり、内黒有台椀はミガキを行わないタイプになる。この資料を11世紀中葉頃と推定したい。

新 有台の器種がなくなる段階。無台椀も厚手でバラエティーが少くなり、直線的に立ち上がるようになる。柱状高台皿は台部が外に開くタイプとなる。この資料を12世紀初頭～前半頃と推定したい。

3区資料 小皿は貝田遺跡の中ではもっとも口径が小さくなり、形態にもバラエティーがなくなる。また非口クロ成形の皿が見られる。口縁部二段ナデで端部を面取りするものと、一段ナデのものがある。貝田遺跡で見られた、口径12cm代の器種が見られなくなる。共伴遺物には珠洲焼の一期の古相とみられるものや白磁碗類等がある。この資料を12世紀後半代に位置づけておく。

3) 矢駄アカメ遺跡(羽咋市志賀町)

土師器集中地点 口縁部二段ナデの非口クロ成形の皿が主体となっている。口径15cm前後のものと、口径9cm前後のものがみられる。口クロ成形は少なく、有台の器



第1図 遺跡の位置

種は見られない。また、体部が内湾する小皿は見られない。口クロ成形のものが少ないので組成に偏りが見られるためと考えられる。非口クロ成形の皿は、藤田により検討が行われており[藤田1997]、平安京左京内膳町出土資料との対比から11世紀末頃に位置づけられている。

1号土坑 口クロ成形のものが主体である。柱状高台皿の台部を比較すると、土師器集中地点のものより外に開き後出的なものである。非口クロ成形の口縁部二段ナデのものもあるが、後出する口縁部を面取りしたものが含まれている。やや混じりのある資料と捉えられるが、二段ナデのものも曖昧なものとなっており、土師器集中地点よりも後出するものと考えられる。12世紀前半～中葉頃に位置づけておきたい。

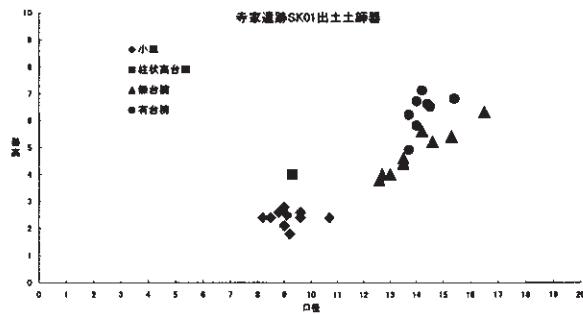
おわりに

上記資料の口クロ土師器について第3図のように変遷図を作成した。年代観についてはまだ検討する必要があると考えているが、その順列についてはほぼこれで良いものと考えている。年代観の定点としたのは、矢駄アカメ遺跡土師器集中地点から出土した京都系土師器皿の年代観と、貝田遺跡第3区出土の珠洲焼である。それ以外には出土遺物からの年代的根拠は薄い。内黒器種(有台椀)の消滅や各器種のバラエティーのある形態の淘汰を考慮して当てはめている。第2図は口径と器高の相関図である。加賀地域との対比をすると、田尻シンペイダン遺跡の資料は貝田遺跡の古と似るが、やや後出するものと考えている。地域が違うため単純に比較することは難しいが、口径12cm代の器種に注目してそう考えている。それはこの口径の器種が徐々に見られなくなっていくという流れが今回提示した能登の資料には見られ、示さなかったが田尻シンペイダンより古いとされる加賀の資料中にも口径12cm代の器種がみられる。加賀・能登が同じ組成の変化をたどるとすれば、田尻シンペイダン遺跡は貝田遺跡の新と矢駄アカメ遺跡1号土坑の間くらいに位置づけられるが、年代観は11世紀末葉頃に位置づけられており違いが生じる。また、12世紀前半とされる三木だいもん遺跡資料も同様と考えられる。12世紀中葉に位置づけられる白江梯川遺跡412号井戸は矢駄アカメ1号土坑よりもやや新しく、非口クロ土師器が出現し12世紀後半に位置づけられる410号井戸は、貝田遺跡3区と同じかやや古いものと考えている。

詳細な検討及びその前後の10世紀・13世紀のこと、また能登でもその他の地域については次の機会を得てのべることとし、今回を入り口として能登の土師器について今後も検討していくこととした。

[引用・参考文献]

- 石川県立埋蔵文化財センター 1979 『田尻シンペイダン遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1988 『寺家遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1995 『富来町貝田遺跡・貝田C遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1998 『矢駄アカメ・イケダ遺跡』
小嶋芳孝 1988 「土器に見る画期と年代観」『寺家遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人 1997 「加賀地域での10・11世紀の土器編年と暦年代」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』
北陸古代土器研究会
出越茂和 1997 「北陸古代後半における椀・皿食器(後)」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
藤田邦雄 1992 「加賀における様相 土師器」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』
1997 「中世北陸の京都系土師器皿 その受容と展開」『第16回中世土器研究会報告資料』中世土器研究会
四柳嘉章 1997 「能登国における土師器の編年」『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』
北陸中世土器研究会編 桂書房



第2図 口径と器高の相関図

